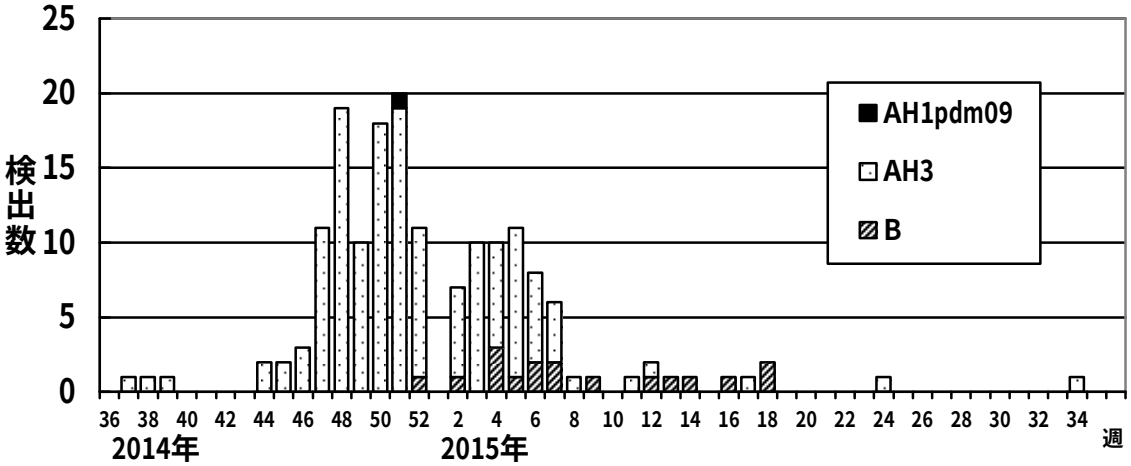
S I A S R (Saitama Infectious Agents Surveillance Report)

インフルエンザ(2014/15 シーズン)

2014/15 シーズンの全国のインフルエンザ流行状況は、2013/14 シーズンとは異なり AH3 亜型主体で、次いで B 型が多く、AH1pdm09 の流行は、小規模でした。県内も同様の状況で、型・亜型別の検出割合は、AH3 亜型が 89.0%、B 型が 10.4%、AH1pdm09 が 0.6%で、AH1pdm09 の検出数は 1 件のみでした。下図に、2014/15 シーズン（2014 年第 36 週～2015 年第 35 週）の県内におけるインフルエンザウイルス検出状況を示しました。

週別インフルエンザウイルス検出状況（2014年9月～2015年8月）



県内で検出された、AH1pdm09 1 株、AH3 亜型　106 株、B 型　12 株について、薬剤耐性マーカーの有無を調査したところ、耐性マーカーを持ったウイルスは認められませんでした。また、国立感染症研究所が 2014/15 シーズンの全国の各型及び亜型のインフルエンザウイルス分離株について、抗インフルエンザ薬（ノイラミニダーゼ阻害薬 4 種類：オセルタミビル、ペラミビル、ザナミビル及びラニナミビル）に対する耐性の有無を調査したところ、AH3 亜型　360 株中 1 株にオセルタミビル及びペラミビル耐性株が認められました（ザナミビル及びラニナミビルに対しては感受性）。一方、AH1pdm09 42 株(ザナミビル及びラニナミビルについては 26 株）及び B 型 291 株には耐性株は認められませんでした。日本における抗インフルエンザ薬使用量は非常に多いので、今後も薬剤耐性株の出現状況の監視が必要です。

2009 年のパンデミックを除けば、近年のインフルエンザ流行には複数の亜型のウイルスが関与しています。今年 9 月以降、すでに県内では AH3 亜型が検出されています。全国では、AH3 亜型が最も多く、次いで AH1pdm09、B 型の順に検出されています。今シーズンの流行ウイルスの把握のために、病原体定点の先生方には、検体採取をよろしくお願いいたします。

インフルエンザに関する最新の全国情報、抗インフルエンザ薬剤耐性調査については、国立感染症研究所感染症情報センターのホームページ(http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr-inf.html)でご覧になれます。